

伊東市史だより

第11号

平成22年3月31日

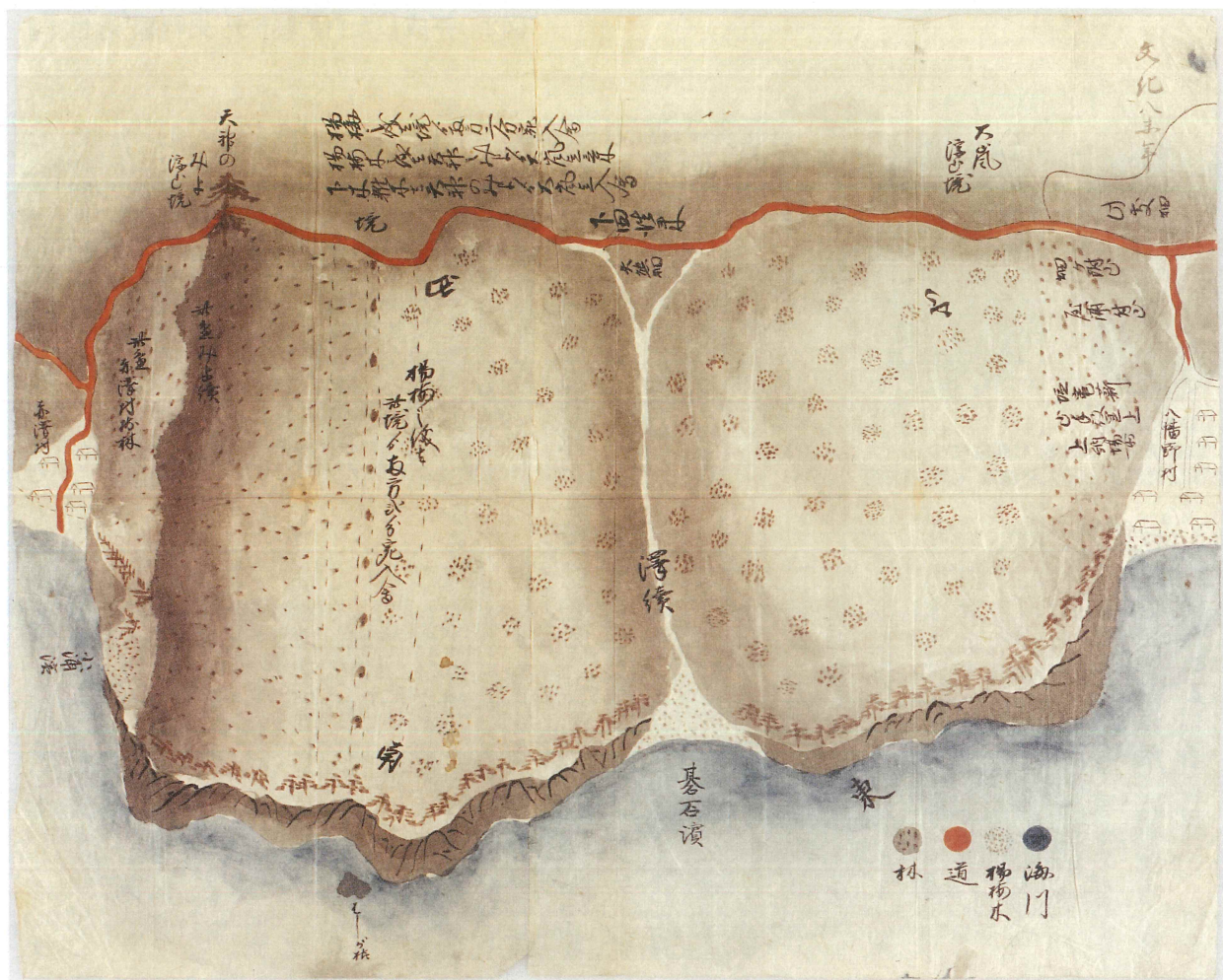


図1 文化八年(1811)八幡野村赤沢村絵図

両村の境界を示す絵図だが、楊梅の樹木が描かれ重要な産物だったことを示している(赤沢区有文書)

【特集】

江戸時代の伊東

このたび、『伊東市史 史料編 近世Ⅰ』を刊行することができました(次頁図2)。伊東市内に残る江戸時代の古文書を集めた図書です。

これまで伊東市史編さん事業では、広く市民に呼びかけて古文書史料の収集と保存・解説に努めてきましたが、今回ようやく公開することができました。八〇〇頁におよぶこの本には、伊東に生きた人たちのさまざまな経験が書き込まれた古文書五五〇点を精選して掲載しました。古文書そのものを残すことも重要ですが、伊東に長い歴史と伝統があることを市民の誰もが確認できる図書として残すことができるのは、大きな意義のあることと思います。

古文書を求めて市内の旧家を訪ね、各地の集会所やお寺などを巡る現地調査を重ね、

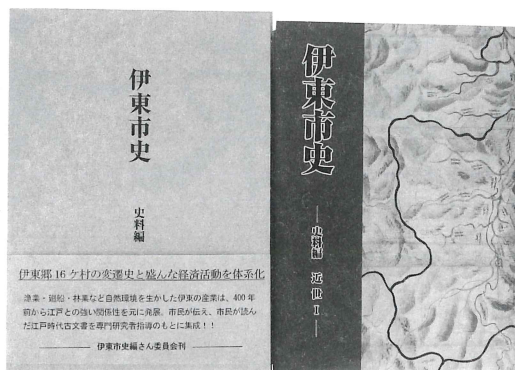


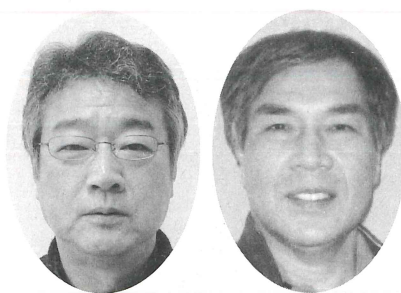
図2 完成した『伊東市史 史料編 近世 I』

そこで出会った古文書群の修復・解読・選定・編集と長時間におよぶ地道な作業を事務局と共に参りました。こうした現地調査を進めた結果、市内に残る江戸時代の古文書は合計六千四百点を数えるに至っています。

伊東郷の範囲には、江戸時代のあいだ十六ヶ村が分立しつつも、伊豆国のなかにあつてひとつの中心的な位置を占めました。そうした環境からすると六千四百点余という古文書の数、少し少ないかなという印象です。もっとも、

私もが現地調査に投入できなかった時間も限られていますし、所在は確認したもの、時間的な都合で解読作業ができなかった古文書も相当数ありますので、今後の課題にしたいと思っています。

また、伊東では元禄地震に伴う大津波や度重なる大火や水害などによって失われてしまった古文書や古記録が相当数あるものと想像されます。そうした限られた史料ではありますが、六千四百点余という点数の古文書の中には、たいへん多くの情報が書き込まれています。江戸時代の人々からの伝言を以下に少し紹介したいと思います。



編集・執筆担当の
田上 繁(神奈川大学教授 写真右)先生と
泉 雅博(跡見学園女子大学教授 写真左)先生

江戸時代約二七〇年間の間にはさまざまな出来事が起りますが、今回の史料集『伊東市史 史料編 近世 I』では、前半の第四章までを田上繁、後半の産業と経済の部分を泉雅博が担当しましたので、その章立ての順に概要を紹介して参りたいと思います。

江戸開府と伊東

伊東が戦国大名北条氏の支配から脱して、徳川氏の支配に組み込まれるのは、天正十八年(一五九〇)三月から七月まで行われた豊臣秀吉による小田原征伐以後のことになります。この合戦は、秀吉が一夜城を築いて小田原城を取り囲む籠城戦となったので、実際に北条氏直が降伏するのは天正十八年七月五日でした。しかし、宇佐美郷には早くも五月四日に徳川家康の家臣伊奈熊蔵によって家康の支配を確定させようとする文書が発給されています(図5)。伊奈熊蔵は、その後、伊豆国代官

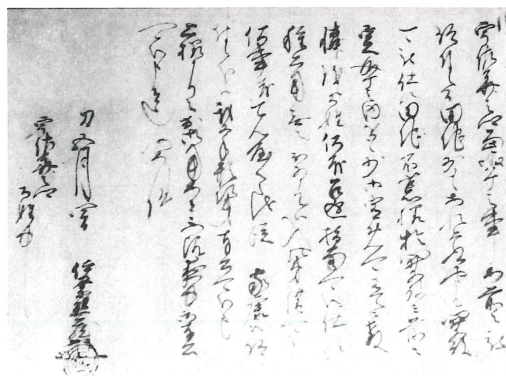


図5 杉山文書 天正18年伊奈熊蔵手形

として伊豆支配を実質的に取り仕切る人物のひとつですから、北条氏滅亡直後の宇佐美の状況を語る資料として重要です。織田・豊臣・徳川という天下統一をめざす支配者の変遷を経て、徳川幕府による支配が確立してゆくと、伊豆は海運をとおして江戸城と城下の都市江戸を支える消費材の生産地として大きな役割を果たすことになりました。

家康の外交顧問的な立場にあった英国人ウィリアム・アダムスが伊東で造船したことは有名ですが、さらに注目す

さまざまな百姓

伊東市史編さん事業の全体を御指導いただいた網野善彦先生(二〇〇四年没)は、「百姓」「イコール「農民」ではないことを主張してこられました。そして、百姓のなかには、さまざまな職業の者が含まれるし、水呑百姓だから貧しいと決めつけることにも異議を唱えてきました。

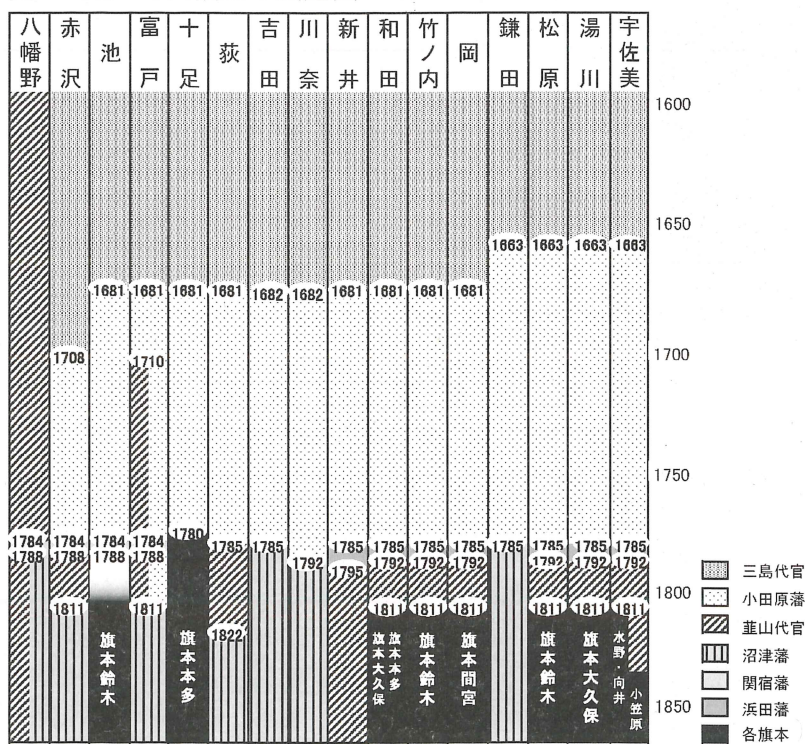
網野先生の主張の正しさを示すように、伊東の百姓の姿を追うと、確かにさまざまな仕事を持ち、水呑百姓のなかにも豊かな暮らしをする者もいます。伊豆の百姓たちのなかには漁師・廻船乗り・木挽きや大工職人や船大工などさまざまな仕事に就く者がいますし、若い女性が江戸へ出て奉公したことも確認できます。江戸へ奉公に出ることを今日的に言えば東京でOL生活をする姿に例えることもできますが、こうしたことは広く行われているのです。

べきは、江戸城の石垣石の大部分が宇佐美や伊東などの伊豆の石丁場から海上を運ばれていたという事実です。この国家的な大事業では、全国各地の大名たちが伊豆に足跡を残し、良質な石材を江戸へ運ぶことを競い合っています。その具体的な姿を示すために細川家文書から「伊豆石場之覚」という文書を収録しました。ここには伊豆の石丁場が七十四ヶ所書き上げられており、当時の大名たちが伊豆各地の港湾や役夫たちを受け入れる条件などを情報収集している姿が読み取れます。

江戸時代初期の伊東

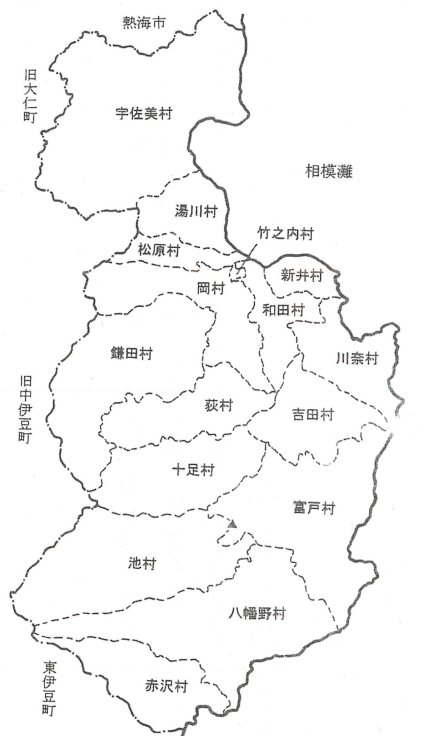
「伊豆は天領」だという説明がよく行われます。しかし、これは江戸時代初期の間だけのことで、中期には天領と小田原・沼津両藩の藩領とが入り混じる形となり、後期には旗本知行地も加わりました。村の領主が交代することは時々起こる現象で、今のところ

図6 江戸時代領主の変遷表



近世の伊東の16村を支配していた領主
伊東の村々は江戸前期の間、八幡野を除いて全村が三島代官の支配を受ける天領だったが、江戸中期の約百年間は小田原藩、次いで江川代官領期の約20年を経て幕末には沼津藩領や旗本領に細分されていった。
なお、この支配の変遷には資料不足から判明していない部分もある。

図7 伊東市域にあった16ヶ村の位置図



家族構成についても収録した「宗門改帳」を見れば、一所帯あたり五、六人前後の構成となつて、江戸時代の家々は、意外に小さな家族構成だったことが分かつて興味深いものがあります。

自然村落の人口

江戸時代は、全国的に物流と商業の発達した時代ですが、機械やエンジンなどの近代技術が浸透する前の段階です。このため、自然環境に大きく左右される時代であり、天候不順による飢饉や風水害などにたびたび見舞われます。これを少し視点を変えてみると、伊東の範囲で自然を高

年貢を請け負う

江戸時代は、村が生活の基本単位になっていました。伊

度に利用したとき、どの程度の人口が生存可能かをみる指標とみることもできます。

図8に村明細帳などから市内の各村の人口変遷を一覧にしました。自然村落が維持できる人口規模がたいへん少ないものであることが確認できます。江戸時代の間は、あまり人口が変動していません。逆に関兄弟の数が減って一戸帯あたりの人員数が増加するのは、幕末から明治以降の現象であることも推定できます。

例えば、和田村の天和二年（一六八二）の船年貢割付状をみると、この村には合計十八艘の船があり、その内訳は荷物を運ぶための「廻船」が九艘、廻船に荷を積み込むための伝聞船が八艘、釣漁の「天

当船」が一艘だったことが判明します。これによって、和田村は江戸と伊豆との間の物資輸送で生計を立てる港町としての性格が強かったことが読み取れます。

同じ頃の宇佐美村では廻船十六艘、漁船二十三艘を数えますので、回漕業と漁業とがなかばするわけで、想像以上に海との関係の強い村だったことが分かります。ただ、残念なことには新井や川奈など今でも海と深いつながりをもつ地区の実態が、これまでの調査では明らかにできていない点が惜しまれます。

川奈の湊明堂

江戸時代の村を単位とした生活の中には、さまざまな争

論や境界争いなども起こっています。また、今と同じように幕府からは各種の補助があり、必要な物資や金銭の給付によって、公的な仕事が行われていました。

例えば、川奈岬の先端には江戸時代の早い時期に「湊明堂」と呼ぶ燈台が設置され、葦山代官所から、そこで使用する燈油と燈心、障子用の布と紙などの調達費用が支給されたうえで運営されています。

この湊明堂の燈火は、どのような荒天の夜にも絶えることなく二百年以上にわたって灯し続けられて、相模湾を往き来する廻船や漁船の遭難を防ぐ役割を負っていたことが川奈村の文書から判明しています。湊明堂は、現在の川奈燈台の位置に置かれていたものですが、その果たして来た役割と歴史的な位置は地域の誇りとしてよいものと思います。

(田上繁)

図9 嘉永二年発行の温泉番付 東小結「豆州湯河原湯」が伊東温泉

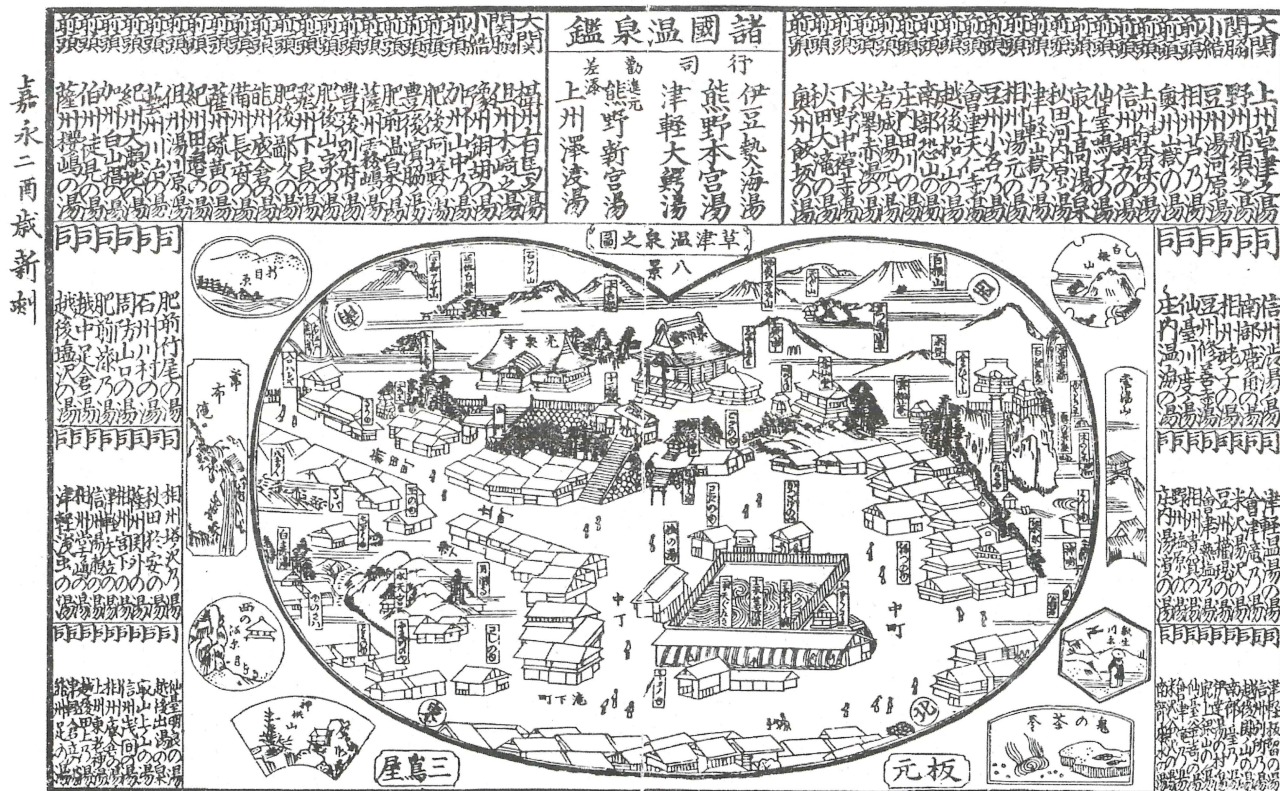


図8 伊東市域における江戸時代の家数・人口の推移

村	高	貞享2・3年 (1685・86)	宝永7年 (1710)	村高/家数 人数/家数	明治中期 宝永7年	明治中期 宝永7年
①宇佐美村	994石719	351軒 1756人	300軒 1653人	1軒当 高3石316 1軒当 5.5人	495軒 2660人	家数 1.7 人数 1.6
②湯川村	201石918	58軒 312人	58軒 312人	1軒当 高3石481 1軒当 5.4人	211軒 1255人	家数 3.6 人数 4.0
③松原村	240石034	71軒 541人	71軒 541人	1軒当 高3石381 1軒当 7.6人	280軒 1400人	家数 2.9 人数 3.6
④和 田 村	183石982	76軒 430人	76軒 430人	1軒当 高2石421 1軒当 5.7人	215軒 1159人	家数 2.2 人数 2.1
⑤竹之内村	178石144	24軒 127人	24軒 127人	1軒当 高7石421 1軒当 5.3人	215軒 1159人	家数 2.2 人数 2.1
⑥新 井 村	78石295	120軒 699人	107軒 657人	1軒当 高0石732 1軒当 6.1人	235軒 1301人	家数 2.0 人数 2.2
⑦岡 村	673石102	64軒 421人	72軒 370人	1軒当 高9石349 1軒当 5.1人	108軒 674人	家数 1.5 人数 1.8
⑧鎌 田 村	327石874	48軒 332人	54軒 347人	1軒当 高6石072 1軒当 6.4人	82軒 579人	家数 1.5 人数 1.7
⑨川 奈 村	118石497	118軒 686人	118軒 686人	1軒当 高1石004 1軒当 5.8人	229軒 1163人	家数 1.9 人数 1.7
⑩吉 田 村	128石189	31軒 223人	31軒 223人	1軒当 高6石097 1軒当 7.2人	56軒 328人	家数 1.3 人数 1.5
⑪萩 村	52石282	35軒 223人	35軒 223人	1軒当 高1石494 1軒当 6.4人	44軒 258人	家数 1.3 人数 1.2
⑫富 戸 村	83石979	(45軒) (300人)	(45軒) (300人)	1軒当 高1石866 1軒当 6.7人	150軒 874人	家数 3.9 人数 2.9
⑬十 足 村	70石674	25軒 125人	25軒 125人	1軒当 高3石720 1軒当 6.6人	29軒 148人	家数 1.5 人数 1.2
⑭八幡野村	83石722				199軒 1056人	家数 1.6 人数 1.3
⑮池 村	111石852		49軒 328人	1軒当 高2石283 1軒当 6.7人	80軒 442人	家数 1.6 人数 1.3
⑯赤 沢 村	23石761				46軒 227人	家数 1.6 人数 1.3
合 計			[1059軒] [6322人]		2459軒 13524人	

1) 貞享2・3年は各村「村明細帳」(和田村文書・鎌田村文書・萩野家文書・小川家文書・新井村文書)、宝永7年は「小田原領村々諸事覚帳」(萩野家文書)、明治中期は『増訂 豆州志稿』より作表。なお、⑫富戸村は、加藤清志『伊東風土記』にある小田原藩領と幕府直轄地を加えた推定数値を引用し、()で示した。
2) 村高及び高の単位は、石・斗・升・合である。また、村高は、本表で引用した原文書の年代の石数を掲げた。

東市内の領域には十六ヶ村が成立しており、これらの村々は、現在になつても行政区や町内会の姿で地域的なまとまりを持っています。

その村の中では名主・組頭・百姓代などの役に就く人が中心になつてさまざまな課題をこなしています。年貢(税金)を滞りなく領主に納めることも村の重要な役割で、具体的な年貢負担を決めた「割付状」

や「皆済目録」などの年貢に関する文書は多数残っています。毎年同じことを繰り返しているように見えますが、年貢関係の文書を丹念に見ると、例えば漁船数の増減が把握できたり、村の中で年貢がどのようになり割られていたか、あるいは、村の特産品が何で、どの程度の利益があったのかなどの情報が得られることがあります。

「伊東の湯―温泉の歴史―」

温泉の歴史をたどることは、伊東の特徴や特殊性を理解するためにたいへん重要な要素です。伊東には、古い伝統をもつ源泉として和田湯・出来湯・猪戸の三箇所が知られていますが、江戸時代初期には「伊東の湯」と総称されています。このうち最も史料に恵まれた和田湯の由緒を中心に説明しておきます。

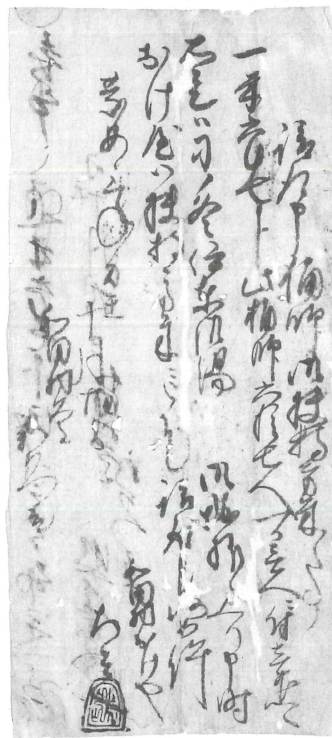
和田湯の源泉は本来、竹之内村の領域に湧出していたものだったようで、和田村からの出作（和田村の者が耕作する）によって、いつの間にか和田村に組み込まれました。ものだと、竹之内村と和田村が、その利用権をめぐって長期間の争いをしました。この争論に係った文書が残されたことによって、和田湯に関する由緒が後世に伝わる結果になりました。

前頁の図9に示したように江戸後期には伊東温泉は「豆

州湯河原湯」と呼ばれることもあり、当時の「見立番付」と呼ばれる印刷物のなかで東の「小結」にランキングされています。江戸後期には既に庶民的な人気の高い温泉となっていたわけです。

しかし、和田湯の由緒は江戸初期の慶長年間までさかのぼることができます。正確にいつから温泉湧出が始まったものかは分かりませんが、慶長三年（一五九八）には既に入浴のための湯小屋が建てられ、明暦元年（一六五五）には、大名たちの入浴に備えて「御宿」が建てられています。慶安三年（一六五〇）には樽詰めにされた伊東の湯が、江戸城内の將軍徳川家光に献上されると

図10 慶安三年に和田湯が江戸へ文書として献上されたこと（須美区有文書）



いう栄誉に浴しています（図10参照）。また、伊東に湯治にきた大名もあり、紀州徳川家・井伊掃部頭・幕臣伊奈氏などの入湯があったことが記されています。

このように伊東の温泉は、江戸時代初期には將軍や大名たちに愛される存在になっていきますが、江戸後期から幕末には樽詰めにされた温泉が「薬湯」として江戸へ運ばれて庶民の間でも大人気をはくしています。

漁業で生きる村々

伊東郷の村々のうち、海付きの村では漁業がたいへん盛んです。そうした村では磯から沖へ八、九町の地先漁場は

自村の支配であり、それより沖は入会いで利用するという原則で諸漁が行われています。

豊かな漁場に恵まれた伊東では、さまざまな漁が行われますが、古文書のなかでは鯛網・鰯網・鰯網・さんま網・飛魚網・めばる釣・鰯縄・鳥賊漁・鰯漁といった言葉が確認できます。また、漁獲を効率的に行うためにさまざまな網や漁法が執られており、地引網・ぼうけ網・手繰網・鰯網・根こそげ網などの言葉も見えています。

こうした漁法や新しい網などをある村が導入すると、隣村ではそれが原因として自村の漁が減るものと懸念され、村同士の乱闘事件や訴訟に至るということが江戸時代のあいだ繰り返されています。それぞれの事件や争論の顛末を示す紙幅はありませんが、そうした争いの背後には、大消費地江戸を控えて、漁獲物による収入が村の生活を大きく支えていた実態が反映している

ものとみられます。豊かな漁場は豊かな市場と連動することで漁業が成立するという仕組みが、江戸時代の早い段階には既に成立していたとみるべきでしょう。

注目される動向のひとつとして、江戸城内の「御膳」に使用される「御用活鯛」の調達、和田村の地引網で行われていたことを挙げることで

また、江戸へ鮮魚を運ぶための押送船や伊東での漁獲物を扱う池田弥兵衛などの商人や五十集と江戸商人の活動は、経済的に非常に重要な位置を占めていたものと思われ

林産物と廻船経営

江戸時代の伊東郷のなかでは、山林と廻船を持つことを条件にして経営に成功した家が確認できます。

宇佐美の荻野家、和田の下田家、浜野家、川奈の前島家、八幡野の山川家などを挙げる

いずれも山林と廻船をもつて経営に成功した家です。もちろん、この他にも多くの家々がさまざまな経営内容で成功しているはずですが、古文書史料と共に経営の内容が確認できた例を見ると、林産物を江戸へ運ぶことが、この地域に大きな収入をもたらしていたことが確かめられます。

伊東の山々から運ばれた産物には薪・炭・材木・石・蜜柑・九年母・黒文字・楊梅・柴胡・山葵などが挙げられます。

薪は廻船で大量に運ばれて、江戸庶民の煮炊きに使われました。黒文字は、伊東の山々にたくさんある落葉低木ですが、江戸の人々の歯磨きや楊枝に使われていたようです。

海難発生と救助

江戸時代の航海は観天望氣に頼り、風に任せて大海に乗り出します。このため、時化で遭難する船の記録が多数あります。江戸時代の海難救助は、法的な整備がかなり進ん

でおり、救助から漂流荷物や船体・船具の処理や届出の書式まで、非常に良く整った形で海難事件が処理されます。難破した船が、どの村の海岸に漂着するかで救助を担当する村が決められる仕組みでしたが、伊東の浜にもたびたび遭難船が流れ着きます。

寛文十二年（一六七二）閏六月、伊豆国戸田村から薪を積んで江戸を目指していた二艘の船が、和田浜に漂着した例や大阪や紀伊半島から航海してきた船が難破した事例もみられます。また、日本海側の越後国内から年貢米を積み込んだ九州熊本の本船が三浦半島沖で難破して、通りかかった伊豆の廻船によって積荷の米が不正に処分されてしまうという事件も発生しています。

江戸時代は「物流列島」とも呼ばれるほど大量の物資が海運で国内を駆け巡り、遭難も多発する情勢だったのです。

酒造が行われる

和田村では、江戸時代前期から「忠右衛門」と「作左衛門」の二人が酒造を行っていました。酒造を制限したい幕府側の思惑などもあって、伊東での酒造がどのような結末となるのか、詳細は判明していません。

伊豆の銘酒と言えは將軍家に献上されていたという葦山の江川酒が有名ですが、伊東

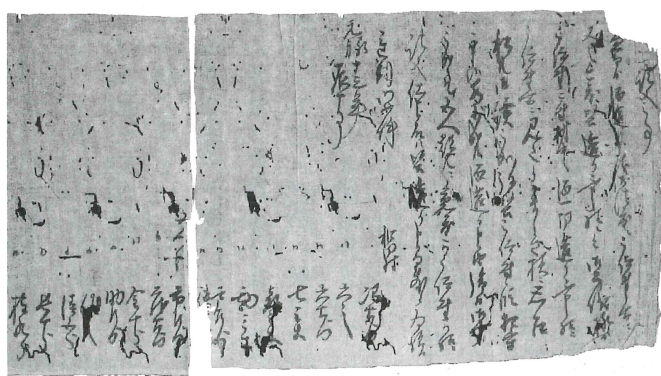


図11 酒造のことが記された文書（須美区有文書より）



図12 奉納網漁絵馬(川奈三嶋神社蔵)

にも古くからの銘酒があつたことになります。どのような酒だったかについて、もう少し追跡する必要があると思います。引き続き『伊東市史通史編』の刊行に向けて追跡してみたいところです。

(泉雅博)

古文書の扱い

以上のとおり、江戸時代の古文書から読み取れるさまざまな歴史を列挙しました。ここで触れなかったこともたく

さんありますが、特に宗教・文化・村社会のことなどは、次に計画している『伊東市史史料編 近世Ⅱ』にまとめる予定です。

今回、出版にこぎつけることができたのは、実は古文書の解読作業という非常に手間のかかる仕事を市民ボランティアの方々が営々と重ねてこられた成果に負うところが大きいのです。

市立図書館の「古文書講座」に参加された方たちを中心に、解読作業が二十数年にわたって行われてきました。そうした皆様の解読成果を援用させていただいて、ようやく未来に残せる遺産として、この本が出来あがりました。

先祖たちが経験したさまざまな出来事を伊東市の将来を担う子どもたちに伝えることができれば幸いです。

(田上 繁)

市史編さん室から

これまでの伊東市史編さん事業で合計二十五冊の図書を発刊させていただきました(写真)。どれも好評で、既に品切れになった本もありますが、ご存知ない方のためにお知らせします。

図13 右上の『図説 伊東の歴史』は、伊東市の三万年に



図13 伊東市史編さん事業による出版物

およぶ長い歴史を原始から現代まで写真や図表で分かりやすく解説した図書で、たいへん好評です。

写真下段の八冊は、雑誌形式の本で、伊東のさまざまな歴史・文化・自然に焦点を当てた記事が多数収録されています。8号まで刊行して、三十六タイトルの講演録や論文を収めました。論文と言っても難しいものではありません。大室山の山焼きの伝統や江戸時代の漁業・林業に関する論考もあつて、身近で興味深い記事ばかりです。

『図説 伊東の歴史』は二千年、雑誌『伊東の今・昔』伊東市史研究』各号は一千円。教育委員会窓口か市内書店で御注文ください。

編集発行 伊東市教育委員会

生涯学習課市史編さん担当

〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号

TEL 〇五五七-三六〇二一 内線二八四六